

「おじいちゃんのむね」

天^{てん}田^だ 周^{しゅう}作^{さく}

ぼくはおじいちゃんのむねが大すぎです。

あたたかくて大きくていいにおいがして、どんなぼくでもぎゅつとくつつくといつもかわらずにホツとできるからです。

お母さんがお休みの日にべん強に行つてさびしい時も、おなががいっぱいでうとうとねむつた時も、わかっているのがまんできなくて口答えをしてしまつておじいちゃんに「たわけ」としかられた時も、ぎゅつとくつつくとふしぎとほんわかい気持ちになります。

おじいちゃんがぼくの年のころには、せんそうで食べるものがなくてさつまいものつるを食べたり、次つぎに落ちてくるとしよういだんによる火事で町中があついたので、家ぞくとはなればなれになつて川にとびこみ、つかつてあつさをしのいだり、目の前で人がやけしんだり、今のぼくにはそうぞうでない世界を生きていたと聞きました。

どんなにこわかつただろう、心細かつただろうと思うとなきそうになりました。ぼくはおじいちゃんがそんな子どもの

ころをすごしたと知つてかわいそうだと思いました。

でも、おじいちゃんは少しも大へんだったとは言いません。おじいちゃんは八十才をすぎていて、みんなからけんこうを心配される年なのに、いつも「おじいちゃんはあとでいいから。」と家ぞくのことを心配してくれます。とくにぼくには、ごちそうさまの後で「おなかいっぱいになつたか。」とかならず聞いてくれます。

家ぞくで一番お年よりだけど、一番強くてやさしいと思います。だから、おじいちゃんのむねは安心できるのだろうとはくは思います。

いつもありがとう。そして、いつまでも元気でいてください。ぼくが大きくなつて、おじいちゃんみたいに強くてやさしくなれるよう見まもつていてほしいです。

そして、ぼくが口答えをしてしまつた時は「たわけ」といつまでも元気にしかつてほしいです。ぼくはおじいちゃんのむねにぎゅつとくつつきたいから。